

日本語における〈記憶〉のメタファーについて

丁 昊天

1. はじめに

心理現象としての記憶は誰も経験することである。当該現象がどのように概念として捉えられるのかを論じる先行研究において、その理解にメタファーが関与していることが指摘されている。例えば、Lakoff(1991)、Lakoff & Johnson(1999)では〈記憶〉¹⁾はMemorizing、Memory、Rememberingとの3つの側面からなっているとし、その理解に〈食べ物〉、〈知覚〉、〈地点〉、〈物体〉、〈移動物〉、〈建造物〉、〈書くこと〉、〈子供〉との起点領域が関わっていると述べている。一方、楠見(1992)は大学生・社会人を対象に、「記憶は～のようだ。何故なら～」という形式で比喩を作り、理由を書くことを求める質問紙方式で収集した用例に基づき、〈記憶〉に関する一般人の知識を類型化し、忘却過程を表すとき、自然物のメタファーが多用されることを示している。このように、〈記憶〉はいくつかの側面からなっており、表される記憶過程と利用される概念メタファーの種類の間にある一定の関連性が存在する可能性が示唆されてきたが、詳細な検討は見当たらない。

また、瀬戸(1995:198-203)では〈ろう板〉と〈貯蔵庫〉との二つの中心点に〈入れ物〉と〈中身〉の観点を加えると整理できるとし、多岐にわたる記憶メタファーを体系的に整理することの可能性を示唆している。しかし、瀬戸(1995)で取り上げられた4つのメタファーは前出のLakoff(1991)、Lakoff & Johnson(1999)が指摘する起点領域をすべてカバーできないことから、〈記憶〉を目標領域とするメタファー同士の関係についてはまだ検討する余地があると考えられる。

以上のような現状を踏まえ、本稿では、日本語において〈記憶〉がどのように切り出され、表現として立ち現れているのか、実際の言語表現の証拠から類型化して分析することで、先行研究での結論を修正しながら、〈記憶〉がいかに概念メタファーによって構造化されているのかについて、その全体像の解明を試みる。

2. 調査方法及び調査結果

本研究は、〈記憶〉がどのような起点領域から形成されているのかを検討するものであるため、目標領域志向の調査方法であるmetaphorical pattern analysis通称MPA(Stefanowitsch 2006)に従い、データ収集と分析を行った。コーパス調査にあたり、現代日本語書き言葉均衡コーパスのオンライン版「中納言」(以下BCCWJ²⁾)及びその検

索ツールであるNINJAL LWP for BCCWJ (以下NLB) を利用した。次の引用にみるように、MPAは検索語の選定、メタファー表現の抽出と写像関係の特定との3つのステップからなっている。具体的な操作方法に関しては、以下順次に検討する。

(前略) 我々は、調査対象の領域を参照する語彙項目を選択し、コーパスに出現するそのサンプルの抽出を行う。次にこのサンプルの中で、検索語が含まれているすべてのメタファー表現を特定し、それらを一般的な写像を表す一貫したグループにまとめる。
Stefanowitsch (2006 : 64)

たくさんの用例をもとに記述的一般化を行うことはコーパスを用いた研究において望ましいと思われるとはいえ、本研究は人手による分析が不可欠なメタファー表現を対象とするため、膨大な量のデータを分析対象とすると、人為的ミスの可能性が相対的に増えることになりかねない。適切なデータ量を定めるため、『分類語彙表 増補改訂版』に記載された<記憶>に関する類義語のBCCWJにおける使用頻度をまず調べた。その中で名詞「記憶」の用例数が最も多いことを確認し、それを正式調査の検索語に選んだ。BCCWJから「記憶+助詞+動詞」(2325件)、「記憶+の+名詞」(643件)、「形容詞/形容動詞+記憶」(215件)との3種類のコロケーション表現を延べ3183件抽出した。

収集された言語データからメタファー表現を選別するため、メタファー表現認定方法 *metaphor identification procedure*、通称MIP (Pragglejaz Group 2007) を用いた。次に示す手順で確認できるように、MIPではメタファー的意味を表現の文脈上の意味とより基本的な意味との対比から生じる間接的意味と位置付けている。基本義確認のための辞書として『大辞林第4版』と『広辞苑第7版』を利用した。

1. テキスト全体を読む
 2. 語の区切りを決定する
 - 3a. それぞれの語に対して、文脈上の意味を決定する
 - 3b. それぞれの語に対して、基本義を決定する
 - 3c. もし文脈上の意味 (a) と基本義 (b) の間に乖離がある場合、その乖離が対照可能であり、かつ、比較によって理解できるか判定する
 4. できる場合、メタファーと認定する
- Pragglejaz Group (2007 : 3)

MPAは目標領域がすでに決まっている前提に立っているものであるため、写像関係を想定することは、実質的には起点領域を見立てることに置き換えられる。起点領域特定の仕方を明示していないStefanowitsch (2006) に対して、本研究では基本義のほか、名詞「記憶」と共起するSD表現³⁾の共起情報を調べることで、起点領域を特定した。例として、「記憶をたどる」というメタファーパターンを考えてみる。『大辞林第4版』によると、「たどる」の基本義は「知らない道、歩みにくい道を一步一步たしかめるようにして進む」である。また、「たどる」についてNLBで調べたところ、それと共起する頻度順の上位20語は道に関連する言葉が大半を占める⁴⁾。したがって、「記憶をたどる」は<道>を起点領域としているという結論に至る。

上述した分析を行った結果、表1に示す〈所有物〉、〈生き物〉、〈痕跡〉、〈容器〉、〈線/道〉、〈壊れ物〉、〈移動物/地点〉と〈潜在物〉との8種類の表現の生産性⁵⁾と推論の一貫性を有する安定したメタファー的写像関係を確認することができた⁶⁾。なお、記憶過程の呼称に関しては認知心理学(高野1995、太田・巖島2011)の慣例に従い、次の意味で用いている。

- 符号化(encoding) ← ある内容を覚える
 貯蔵(storage) ← 覚えた内容を保持している
 回想(voluntary recollection) ← 覚えた/忘れていた内容を意図的に思い出す
 想起(involuntary recollection) ← 覚えた/忘れていた内容が自発的に思い出される
 忘却(forggetting) ← 覚えた内容を意図的/非意図的に一部/全部忘れる

表1 記憶メタファーと記憶過程の対応関係

	符号化	貯蔵	想起	回想	忘却
所有物	ものを手に入れること	ものを所有していること		ものを取り戻すこと	ものを失うこと
生き物			生き物が目覚める/蘇ること	生き物を目覚め/再生させること	
痕跡	痕跡を残すこと	痕跡が残っていること			痕跡が見えないようになる/すること
容器	容器にものを入れること	容器にものが入っていること	容器からものが出てくること	容器からものを取り出すこと	容器の中のものがなくなる/出られないようにすること
線/道				線をたぐる/道をたどること	線が切れること
壊れ物					ものの形の崩壊
移動物/地点			ものが主体のもとに帰ってくる/地点に接近すること	ものを主体のもとに帰らせること	ものが主体のもとから離れていく/地点から離れること
潜在物			ものが浮かぶこと	ものを掘り起こすこと	ものを埋めること

写像関係を反映する典型的な用例の詳細な検討は次節に譲るが、ここでは、〈移動物〉と〈地点〉を〈移動物/地点〉という1つの写像関係にまとめることについて、次の(1)を例に挙げて説明しておく。文脈で確認できるように、回想を主体がものを自分のもとに帰らせることとして(1a)では捉えられているのと対照的に、(1b)において回想は移動する主体が進行方向とは反対の背後を振り向くこととして表現されている。この点に着目したのか、Lakoff(1991)では〈地点〉、〈移動物〉を起点領域とする Remembering の写像を〈過去の地点に戻る〉、〈移動物が主体の下に戻る〉と区別して記述している。しかし、何が移動するかによって2つに分類できるものの、主体と記憶した出来事との距離関係を介して記憶過程を捉えている点において両者は相通じると考えられ、本研究では〈移動物〉と〈地点〉を1つの写像関係にまとめた。

- (1) a. 大人になっても、傷跡が目立っている。大人になっても遠い記憶を呼び返すことがある。(Yahoo! ブログ⁷⁾)
b. ふと、カイは記憶を振り返る。(藤原真莉『姫さまに願いを』)

3. 考察

本節では起点領域をもとに分けられた写像を記憶過程別に再整理し、その表現に関わる起点領域の種類豊富により、忘却、想起/回想、符号化/貯蔵という順で写像の関係について考察する。その第一歩として、<痕跡>と<壊れ物>をまず取り上げる。何故なら、そこから忘却及びその対概念である想起/回想を目標領域とする写像関係の共通点の解明につながる糸口が得られるからである。

<痕跡>と<壊れ物>は記憶過程とは別に、記憶の状態についてのより精緻な語りを可能にしている。次の例(2)に見るように、よく覚えている状態は「鮮明」、記憶が不確かな状態は「かすれる」、「曖昧模糊」、時間の中で変化し、真実から遠ざかることは「歪曲する」、「塗り替える」、ところどころしか思い出せない状態はものの全体の形が崩れてできた「断片」としてそれぞれ認識されている。各々の具体的な言語表現を捨象すれば、記憶の状態＝記憶されている内容であると判断・識別・理解できる状態からの乖離の度合いという対応関係が見出される。

- (2) a. 母の死は、私の中ではまるで昨日の出来事のような鮮明な記憶。(Yahoo! ブログ)
b. 記憶がだいぶかすれ深い霧の中をさ迷っているような、曖昧模糊とした感覚にとらわれてしまったのだ(熊澤文夫『メーサイ夜話』)。
c. もちろん、ショックにより記憶が歪曲してしまったのだろう。(小林泰三『海を見る人』)
d. そのひとのなかでは嘘じゃないの。ほんとのことなの。そういうふうに、記憶を塗り替えてるの。(若竹七海『八月の降霊会』)
e. 「ああ…そういえば、そんなことを言ってたっけ…」寝起きで回転の鈍い頭から、記憶の断片を引っ張り出す。(三雲岳斗『ランブルフィッシュ』)

この度合いを仮に「視認性」と呼ぶ。視認性の低下、つまり視認不能になることが忘却の表現に用いられること、言い換えれば、記憶の状態の変化の表現が忘却の表現と連続していることが観察される。例えば、次の(3)における「洗い流す」は痕跡が薄れることを表すという抽象レベルでは(2b)の「かすれる」と共通項がある一方、前者によって表されるのは、記憶の変容ではなく、「片山」が努めて思い出された嫌な記憶を忘れようとしているという事態である。両者の意味の相違が生じる理由を变化の程度差に求めることができると思われる。というのは、(2b)の「かすれる」が「書いた字や線の一部が切れ切れに白く欠ける」(『大辞林第4版』)、つまり、痕跡がまだ一部が残ることを指すのに対し、(3)の「洗い流す」は痕跡の完全消滅を目的とする動作を指すということである。整理すると、<痕跡>と<壊れ物>において、記憶の状態の変化は視

認不能な状態を介して把握され、記憶の状態の変化の極限状態が忘却に転化するということになる。

- (3) ショックで忘れていたのを思い出して、堪えられなくなったのよ。その記憶を洗い流そうとして…」片山は、肯いた。(赤川次郎『三毛猫ホームズの幽霊クラブ』)

3.1 忘却について

忘却を目標概念とする写像を再整理すると、視認不能になること=忘却という対応関係は<痕跡>と<壊れ物>に限ったことではないことが分かる。結論を先取りすれば、①<線/道>、②<移動物/地点>、③<容器>、<所有物>、④<容器(中身)>、<潜在物>との4つのグループに分けられる写像は、忘却=視認不能という1つの対応関係の具現化・細緻化にすぎず、すべてこれに集約される。具体的に述べると、次の例(4)で確認できるように、4つのグループの写像において忘却はそれぞれ①初期状態からの変形(4a)、②主体と知覚対象の間の遠隔(4b)、③主体の知覚の及ぶ範囲からの消失(4c、4d)、④物理的な遮断(4e、4f)になぞらえて把握されている。そして、そのいずれも、我々が日常的な視覚経験から得た視認性に関する推論との間に関連性が認められる。つまり、もとの形から変化するほど、遠いほど、あるものがそれであると確認しにくく、主体との間に遮りがあれば、それを知覚するには余計な労力がかかるといふことである。

- (4) a. のんちゃんの記憶はそこで断ち切られている。(小池真理子『夜は満ちる』)
b. それでも記憶は確実に遠ざかっていくし、僕はあまりに多くのことを既に忘れてしまった。(村上春樹『ノルウェーの森』)
c. 忌まわしい屈辱的なものは記憶から追ひ払おうと、お婆さんに関することは何もかも忘れてしまった。(今西恒一『細い蔓』)
d. 手に入れたい記憶、捨てちみたい記憶のご用はありませんか。(勝目梓『真夜中の女』)
e. 早瀬は思い出したくないシーンを思い出そうになり、記憶にさっとフタをした。(梓河人/飯田譲治『アナザヘヴン』)
f. 君の記憶はクンパルシートと共に時間の埃の中に静かに埋没していきました。(嶽本野ばら『カフェー小品集』)

視認性をもって忘却を目標概念とする写像を捉えると、明瞭に見えてくるのは知覚メタファーが当該写像の成立基盤の一部となっていることである。人間は五感を介して情報を得て外部世界とインターラクトするものであるため、能動的であれ受動的であれ、外部世界を眺めるとき、共起的にそれについての理解が発生する。それにより、視覚及びそれを生じさせる動作は物事の知覚にとどまらず、認識とも深くかかわっている(Lakoff & Johnson 1980, Sweetser 1990 : 55, 鍋島 2004)。<見ること>に関する知識が<知る/分かること>という心的営みに写像されるとすれば、後者と意味的に近接している<記憶>が<見ること>との間にある程度の認知的な関わりが存在する

ことも想像に難くない。その推察が忘却を目標概念とするメタファー的写像に一貫して認められる視認性の存在により確認できると考えられる。

3.2 想起、回想について

概念メタファーとは構造的写像関係であるため、対概念は基本的に同様の概念に対応関係を持つことが予想される。実際に想起/回想を目標概念とする写像関係を整理すると、次に見るグループ①<線/道>、<移動物/地点>、②<容器>、③<所有物>はそれぞれ前述した忘却の場合と対義的な関係にある接近、遮断の撤廃、返還としてまとめられることは明らかであり、想起/回想＝視認可能になる/するという対応関係の存在は認められると思われる。

- ① 回想は線をたぐること、想起は自力移動のできるものが主体のもとに帰ってくる
こと、回想は主体が地点に接近すること
- ② 回想は容器からものを取り出すこと、想起は容器からものが出てくること
- ③ 回想は所有物を取り戻すこと

<生き物>の用例を次の(5)に挙げる。「眠る」、「呼び覚ます」、「蘇る」が明示するように、想起/回想が眠っていたものあるいは死んでいたものを覚醒・蘇生することと関連付けられている。一見したところ、視覚経験との関連性が薄く、視認性の範囲をはみ出ているように見えるが、ここで注意したいのは、目覚めたら体を起こすというような日常的なシーンにおいて、覚醒・蘇生と「横になっていたものが立ち上がり、直立した状態になる」という上方移動の間に時間的連続性が想定できるということである。対象が姿勢の変化により、高く位置するようになり、視覚的に際立った結果、人に存在を認められやすくなって顕在化すること、つまり上方移動と見えやすさとの共起を我々は日常的に経験している。両者を考え合わせると、<生き物>は間接的に視認性と関連しているといえよう。

(5) a. 意識の底に眠る遠い記憶を呼びさます者のような、複雑な面持で、いつまでも立ち尽くしていた。(夏樹静子『Mの悲劇』)

b. 玄関まで歩くうちに、倉橋は残暑以来のいやな記憶がよみがえってきた。
(高任和夫『告発倒産』)

<生き物>と同様、高い位置と視認性の高さの共起関係によって動機づけられると推測されるメタファーとして<潜在物>がある。次の例(6)に見るように、<潜在物>の場合、想起はものが自主的に浮上することである「浮かぶ」、想起意識の要る回想は深層にあるものを「掘り起こす」行為にそれぞれ見立てられる。空間的位置である「上」が想起/回想と結びついているわけである。

(6) a. しかしながら脳が熱くなるほど懸命に思い返してみても、その上側がどんな風だったか、記憶の表面に浮かんで来なかった。(飯野文彦『夢魔』)

b. 井原は、腰を降ろし、ゆっくりと記憶を掘り起こすようにしながら、話を始める。(金久保茂樹『長崎・京都、復讐の殺人ルート』)

<生き物>と<潜在物>に垂直方向の移動を認めると、この2つの写像と2節で検討した<移動物/地点>との間の平行性が目につく。それは視認性と並行して、移動もまた記憶メタファーに共通する一貫的要素であることを示唆するとともに、なぜ移動が<記憶>と結びつくことになったのかという問題を新たに浮かび上がらせる。その理由を記憶と時間との関連に求めることができると思われる。Lakoff & Johnson (1980) 以来、時間経過が空間移動に基づいて経験・理解されているとする TIME IS MOTION は広く受け入れられている (Moore2000、碓井 2002)。記憶の内容は常に時間の下位概念である過去と結びついていることから、記憶メタファーが間接的に時間メタファーに由来する空間移動の論理を継承することは想像に難くない。また、時間メタファーはさらに、時間が空間を移動する存在と見なされる時間移動型と時間が静的な空間領域と見なされる主体移動型との2種に下位分類できる。それが2節で検討した<移動物/地点>における自力移動のできるものと静止した参照点という一見相矛盾する2つの概念化の仕方ともうまく対応することも記憶メタファーと時間メタファーの関係性を裏付けると考えられる。

ここで3.1節の内容も含めてまとめる。想起/回想、忘却を目標領域とするメタファーの写像同士は起点領域が異なるものの、互いに重なり合う部分を持ち、連続性を呈している。時間メタファーと知覚メタファーという基本的なメタファーからそれぞれ移動と見ることの論理を継承し、移動に内在する遠近という要素との関係もあり、見ることは特に視認性として具現化する。それについての推論が想起/回想、忘却に写像され、後者に対する言説に利用される。

3.3 符号化、貯蔵について

<所有物>、<容器>、<痕跡>との3種類の写像関係は本来抽象的な内容しか持っていないはずの記憶を物質的な存在と見立て、形あるものに対して行いうる働きかけ及びその結果、つまり物体操作に関する知識を介して符号化と貯蔵を概念化する。

<所有物>はただ存在するだけでなく、常に誰かの支配下にあり、場合によってはほかの人のもとに移動するものである、つまり所有物の移転という普遍的な知識をわれわれは持っていると思われる。次の例(7)において、記憶は引き継いだり、与えたりすることのできるものとして表現されている。そこから、<所有物>についての上述した知識が<記憶>に写像されていることが伺える。

(7) a. 戦い足りぬつわもの、意志と記憶をひきつがせた<竜の傭兵>を産みだした。(友野詳『暗闇の竜と迷宮』)

b. わたしはうその記憶をそなたにあたえようとしたのだぞ。(村山早紀『シェーラひめのぼうけんダイヤモンドの都』)

1節で述べたことになるが、瀬戸(1995: 198-203)によると記憶は<容器>とその中に入る<中身>として捉えられる。用例を実際観察したところ、蓄積した過去の情報の全体と対置させ、特定の記憶(8aでは「蚊帳」についての記憶)を捉えるとき、前者

が容器、後者が中身になぞらえられる。それに対して、(8b)の「空っぽではない」という文脈から読み取れるように、「記憶は身体の中にある」という捉え方が前面に出るとき、蓄積した過去の情報の全体が特定の記憶かに関わらず、中身としてメタファー的に表現されるという使い分けがあるように見受けられる。

- (8) a. 殺虫剤やエアコンの普及で、すっかり姿を消してしまった蚊帳ではあるが、私の世代の人間には、まだしっかりと記憶の引き出しに入っている光景ではないか。(町田忍『蚊遣り豚の謎』)
- b. 人というのはありとあらゆる記憶をつめこんで、それを燃料にして生きているもんだから、空っぽではないですね。(村上春樹/柴田元幸『柴田元幸と9人の作家たち』)

<所有物>、<容器>と比較すると、<痕跡>を起点領域とする符号化、貯蔵の概念化は特異なものに思える。何故ならば、<痕跡>に属するメタファーパターンを次頁の表2のように整理すると分かるように、写像<痕跡を残すこと>の具現例が刻むことという非常に限定した操作に集中しているからである。

表2 <符号化は痕跡を残すこと>に属するメタファーパターンの内訳

刻む系(延べ30件)	記憶に刻み込む(8)、記憶に刻む(8)、記憶に刻み付ける(5)、記憶を刻む(4)、記憶を刻み込む(3)、記憶を刻み付ける(1)、記憶に刻印する(1)
焼く系(延べ10件)	記憶に焼き付く(5)、記憶が焼き付く(3)、記憶に焼き付ける(1)、記憶に焼く(1)
刷る系(延べ3件)	記憶を刷り込む(2)、記憶に刷り込む(1)
染む系(延べ2件)	記憶が染み付く(1)、記憶に染み付く(1)
書く系(延べ2件)	記憶を書き込む(1)、記憶に書き込む(1)

この現象について、Kövecses (2010 : 74-75) によって提案された歴史的共起性 (source being the root of the target) という基盤をもってそれを説明することができる。記憶の固定化は古より記録と密接不可分の関係にある (Draaisma2001)。そのことについて、記憶を指示する基本語彙の語源をたどれば、いくつかの手がかりが得られる。例えば、英語における memory はラテン語の memoria に由来し、memoria はメモをその基本義とするという。また、古代中国語の場合、記憶することを表す「記」と「誌」にはそれぞれ「分疏してしるす」(『説文(段注本)』)、「記誌なり」(『説文新附』) という記録に関連する意味が認められている(『字通』参照)。このような記憶と記録を同一視する傾向の存在を示唆する語源的証拠に加え、人間が最初に手にした記録技術の1つに刻むことがあるという表記史的事実 (Fischer 2001 : 16-17) も考え合わせると、長きにわたって刻むことをもって記憶を記録したという歴史的共起経験は、符号化と貯蔵が刻むという動作及びその結果である痕跡の存続として概念化されることを動機づけたと考えることができる。

4. おわりに

本稿は、認知メタファー理論の枠組みの下で、大規模コーパスを利用して記憶に関

するメタファー表現の分析を試みたものである。記述を行って確認した〈所有物〉、〈生き物〉、〈痕跡〉、〈容器〉、〈線/道〉、〈壊れ物〉、〈移動物/地点〉と〈潜在物〉との8種類のメタファー的写像を記憶過程ごとに再整理し、起点領域が異なる写像は実際、互いに重なり合う部分を持ち、概念的連続性を呈していることを示した。また、考察を通して、時間メタファー、知覚メタファー、存在メタファーから付与されたとされる移動、視認性、物体操作との3つの要素が記憶の概念化に深く関与していること、換言すれば、記憶メタファーがより基本的な概念メタファーの上に成り立っていることと、〈符号化は痕跡を残すこと〉というメタファー的写像は〈記憶〉固有の歴史的共起経験に動機づけられている可能性があることについて論じた。

本稿で提示した言語表現以外にも記憶に関する表現手段が広範に存在するため、本稿の記述で指摘し切れていない記憶に関するメタファーは十分ありうる。また、記憶という概念自身も人間の心の一部に過ぎないため、ほかの隣接領域(例：思考、意識)を視野に入れることも重要であると考えられ、それを今後の課題としたい。

注

- 1) 本稿では認知言語学の慣例にしたがい、概念を〈〉で示す。ただし、起点領域あるいは目標領域として示す場合は(例：時間メタファー)山括弧をつけない。
- 2) BCCWJは書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などのジャンルにまたがって1億430万語のデータを格納しており、各ジャンルについて無作為にサンプルを抽出している。本研究では検索にあたり、すべてのレジスターを検索対象とした。
- 3) Stefanowitsch (2006) の用語であり、起点領域 (source domain) を特定させる表現を指す。本稿の場合、SD表現は「記憶+助詞+動詞」、「記憶+の+名詞」、「形容詞/形容動詞+記憶」の形をとるメタファーパターンで「記憶」と共起する語を指す。
- 4) NLBで検索したところ、「たどる」と共起する頻度順の上位20語は次のようになる。括弧内の数字は延べ出現回数を示す。
一途(252)、道(210)、運命(89)、経過(72)、記憶(65)、歴史(54)、線(52)、傾向(51)、過程(51)、足跡(45)、経路(25)、跡(24)、それ(22)、コース(19)、方向(19)、リンク(18)、ルート(18)、軌跡(17)、小道(16)、道筋(16)
- 5) 「記憶を葬る」のように、〈生き物〉を介して忘却を表すように思われる用例が見当たらないわけではないが、使用頻度が低いことに加え、実現形態のバリエーションにも欠けることから、安定した写像関係にあるとは見なせないと判断した。
- 6) 紙幅の都合上、個々の写像関係についての検討は割愛し、同じ記憶過程を目標領域とするメタファー的写像同士の関係に絞って考察する。
- 7) 用例中の下線はすべて筆者による。記憶メタファーには下線を施し、用例の解釈に重要と思われる箇所には点線を施した。出典は例文後ろの括弧内に示した。

参考文献

- 確井智子 (2002) 「時間認知モデル—認知言語学的観点からの考察—」京都大学大学院 人間・環境学研究科言語科学講座『言語科学論集』8,1-26
- 太田信夫・巖島行雄 (編) (2011) 『現代の認知心理学 2 記憶と日常』京都：北大路書房
- 楠見孝 (1992) 「記憶のメタファー 現代のエスプリ」『特集：エコロジカル・マインド』298,121-130
- 国立国語研究所編 (2004) 『分類語彙表 増補改訂版』
- 瀬戸賢一 (1995) 『空間のレトリック』東京：海鳴社
- 高野陽太郎 (編) (1995) 『認知心理学 2 記憶』東京：東京大学出版会
- 鍋島弘治朗 (2004) 「理解のメタファー—認知言語学的分析—」『大阪大学言語文化学』13, 99-116
- Anatol Stefanowitsch (2006) Words and their metaphors: A corpus-based approach. In: Anatol Stefanowitsch and Stefan Th. Gries(eds.) *Corpus-Based Approaches to Metaphor and Metonymy*,63-105. Berlin /New York: Mouton de Gruyter.
- Douwe Draaisma, Paul Vincent (2001) *Metaphors of Memory: A History of Ideas about the Mind*. Cambridge: Cambridge University Press
- Dr. Gerard J. Steen, Aletta G. Dorst, J. Berenike Herrmann, Anna A. Kaal, Tina Krennmayr, Trijntje Pasma (2010) *A Method for Linguistic Metaphor Identification: From MIP to MIPVU*. Amsterdam: John Benjamins.
- Fischer, Steven Roger (2001) *A History of Writing*. London: Reaktion Books Ltd.
- George Lakoff, Jane Espenson, and Alan Schwartz (1991) *Master Metaphor List*. <http://araw.mede.uic.edu/~alansz/metaphor/METAPHORLIST.pdf>
- George Lakoff and Johnson. 2003 (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press. 渡部昇一他訳 (1986) 『レトリックと人生』東京：大修館書店
- Kovecses, Zoltan.2010 (2002) *Metaphor A Practical Introduction*. New York: Oxford University Press.
- Moore, Kevin E (2000) *Spatial Experience and Temporal Metaphors in Wolof: Point of View, Conceptual Mapping, and Linguistic Practice*. Berkeley, CA: University of California at Berkeley doctoral dissertation.
- Sweetser, Eve (1990) *From etymology to pragmatics: Metaphorical and cultural aspects of semantic structure*. Cambridge: Cambridge University Press. 澤田治美 訳 (2000) 『認知意味論の展開：語源学から語用論まで』東京：研究社出版

謝辞：本稿は表現学会第60回全国大会における研究発表を加筆修正したものである。発表に際し、会場の方々に数々のご助言を頂戴した。また、論文執筆にあたり、査読者の先生方から貴重なコメントをいただいた。記して感謝申し上げたい。

(名古屋大学院生)